アングロ＝ノルマン王国における貴族

中村敦子

【要約】 J・ル＝パトゥーレルによる「ノルマン帝国」論は従来のイングランド一国史観を大きく転換させた。ノルマン＝コンクエストにより成立した英仏海峡にまたがる王国「アングロ＝ノルマン王国」は、ル＝パトゥーレルの主張するように、中世イングランドとノルマンディーを一体化・密着させたのだろうか。現代と異なる中世国家を人的結合国家ととらえるならば、その指標となるのは支配層である貴族たちの実態であろう。本稿はおもにヘンリ一世時代を対象にアングロ＝ノルマン貴族たちの行動に注目し、王／公権との関係を視野にいれつつ、彼らの行動を集合的に把握することを試みる。争乱時、あるいは通常の行政においての王／公権とのかかわりを探ることから、王国の人的構成要素としての貴族たちがイングランドとノルマンディーという地域性に対応しつつ多様な構造を成していたことが導かれるだろう。

史林 七八巻二号 一九九五年三月

はじめに

一〇六六年、ノルマンディー公ギョームは、ヘイスティングスの戦いでイングランド王ハロルドを倒し、イングランド王ウィリアム一世となった。ここにアングロ＝ノルマン王国が成立する。以降、彼の息子たちであるウィリアム二世とヘンリ一世の三代が分裂と争乱の時代を経ながらも、このアングロ＝ノルマン王国を支配する。そののち、ヘンリ一世の死後一一三五年から一一五四年のスティーヴン時代の内乱期を経て、アンジュー家支配へと移り変わっていくのである。

さて、アングロ＝ノルマン時代研究は、かつてはノルマン＝コンクェストにともないノルマンディーからイングランド

に封建制が移されたか否かについての封建制の移植をめぐる議論が中心となっていた。[1] 現在では、封建制度論争をこえたより広い枠組みの中からアングロ＝ノルマン時代をとらえ直そうという研究動向が中心となっているといえよう。その焦点に位置づけられるのが「アングロ＝ノルマン王国」そのものをめぐる議論である。きっかけとなったのは、アングロ＝ノルマン王国論に新たな視点をひらいたル＝パトゥーレル（J. Le Patourel）の主張であった。この議論に関しては、同氏の主著『ノルマン帝国』（一九七六）[2]を中心に、その主張と批判についてすでに紹介があるため、[3] ここでは詳しく論じず、概要のみ述べておくことにしよう。

本稿では以下の略号を用いる。
E. H. R. = *Engeish Historical Review*, *B. I. H. R.* = *Bulletin of the Institute of Historical Research*, *T. R. H. S.* = *Transactions of the Royal Historical Society*

① この論争については青山吉信「『ノルマン＝コンクェスト』の史的意義をめぐる欧米学界の新動向（一）」史学雑誌、七五、一九六六年、同、『イギリス史一』山川出版社、一九九一年、二〇八頁。鈴木利章「『ノルマン征服』研究の新動向」西洋史学、六七、一九六五年に詳しい紹介がある。

② Le Patourel, J., *The Norman Empire*, Oxford, 1976, (*Norman Empire* と略記)

③ 有光秀行「アングロ＝ノルマン王国論のゆくえ」『中世イングランドの社会と国家』イギリス中世史研究会編、山川出版社、一九九四年、八九―一一四頁。

一　研　究　史

（一）アングロ＝ノルマン王国研究

ル＝パトゥーレルの最大の功績は、イングランド国内のみで完結させていた一国史観が支配的であった中世イギリス史研究において、大陸との関係を中心に考察するという新たな視点を打ち出したことにあろう。[1] 同氏によれば、ノルマンコンクェストは、一貫したノルマンディー出身のノルマン人支配圏の拡大と彼らによる植民の流れの一段階という観点でとらえられる。ノルマン人支配圏の拡大というプロセスのなかで、一〇六六年以降のイングランドとノルマンディーは密接

につながり、一体となって「ノルマン帝国」を形成するのである。[2]

ル＝パトゥーレルが強調するのは、一人の君主と、彼をとりまくひとつの宮内府が両地域を行き来することによりイングランドとノルマンディーの双方が同じように統治されていたこと、[3]イングランドとノルマンディーの法や行政が互いに影響しあい同化していったこと、[4]そして君主はイングランドとノルマンディーを不分割の相続家産と考えていたということなどである。[5]また、征服以降大陸から渡ってきた貴族たちも、大陸の従来の所領を手放さずにイングランドに新たに所領を得て、両地域を行き来し、イングランドとノルマンディーで同質の貴族層を成立させたとする。そしてまた君主家系と同じく彼らも両地域の所領をあわせて相続させたいと願っていた。こうしてル＝パトゥーレルは、イングランドとノルマンディーの「同化・求心性」を強く主張するのである。ホリスター（C. W. Hollister）もイングランドとノルマンディーの密接なつながりを主張している。同氏も同様に、イングランドとノルマンディーが一人の君主によって統治されていたこと、行政の双方における共通性、イングランドとノルマンディーの支配層が同質であったとするが、さらにホリスターが重要視するのはノルマンディー「公」が「王」になったという事実である。アングロ＝ノルマン君主がどちらも同じ「王」として統治することにより、フランス王権からのノルマンディーの自立性を高め、イングランドとノルマンディーのつながりは密接なものとなっていった。そして、ヘンリ一世時代においても征服王時代と同じように、イングランドとノルマンディーは共通性を強く持ち続け、ノルマンディーもイングランドも英仏海峡にまたがる王国の一部として統治されていたのである。[6]

しかしながら、このようなイングランドとノルマンディーの密接なつながりや両者の同化の傾向を主張する見解にはすでに批判がなされている。ベイツ（D. R. Bates）、グリーン（J. A. Green）はル＝パトゥーレルの主張を検討し問題点を提示した。[7]それらを次に紹介しよう。両氏はまず、ル＝パトゥーレルはイングランドとノルマンディーの同化・求心性を強調するあまり、現実的な政治社会の違いを無視しがちになっているとする。司法や行政の仕組みが互いに影響しあったこと

は事実だが、それ以上に、イングランドの伝統に根ざした固有の行政機構が存続しておりノルマンディーにおいてもそれは同様であったことを重視すべきである。さらに、「ノルマンディー公」としての権威と、「イングランド王」としての権威が同じであったとは考えられない。征服王朝として成立したイングランドでは王権は強力であり、アングロ＝ノルマン王国の君主たちはその王権の強さを利用したが、ノルマンディーにおいては王権の行使にたいしノルマン貴族の強い抵抗が考えられ、君主がイングランドにおいてと同様の権力を行使しえたとは考えられない。さらにノルマン貴族がどれほどイングランドに均質に広がったかには疑問がもたれ、イングランドとノルマンディーにおいて同質の貴族層が成立したとはいえないと言うことなどである。[9] これらの批判点は多岐に渡るが、全体としてル＝パトゥーレルの開拓した視角を評価しつつもその実証性に疑問を呈しているといえよう。[10]

以上にまとめたアングロ＝ノルマン王国論では、双方の地域における法や行政組織を検証することによって、制度的枠組みから王国の構造を明らかにしようという視角に重点がおかれていた。一方、ヨーロッパ中世封建社会が人的紐帯の網の目からなりたっており、その頂点にたつ王を中心した統治がすぐれて人格的なものであった事実を思い起こす必要がある。アングロ＝ノルマン王国の統治を支えた貴族たちが、イングランドとノルマンディーという二つの地域を含んだ王国においてどのように行動したかという問題は、王国全体の構造の一つの側面を示すだろう。もちろん、彼らが実際にアングロ＝ノルマン王国という枠組みをどのように意識していたかを知る直接の史料はない。[11] 彼らがいかなるときにいかなる行動をとったかを検討し、その社会的背景をさぐる試みを積み重ねてゆかなければならない。

このような問題関心から、本稿ではアングロ＝ノルマン王国の構造を解明する手がかりのひとつとして、内部の貴族たちの具体的な活動に注目する。ではもう一度ル＝パトゥーレルとホリスターがアングロ＝ノルマン王国の貴族たちをどのようにとらえたかをまとめることから出発しよう。[12]

（二）アングロ＝ノルマン貴族研究

「イングランドとノルマンディーの同化・求心性」という視点からは、アングロ＝ノルマン王国の貴族たちは以下のように説明される。

ノルマン＝コンクェストにより、大陸の貴族たちが大量にイングランドに流入し、旧来の支配層であったアングロ＝サクソン貴族にとってかわった。[13] 一方、イングランドの新支配層となったノルマン貴族は、イングランドに新たに大所領をえることになったが、もとの大陸の所領をも依然として維持し続けた。これらの所領は、クロス・チャネル・エステイト、つまり英仏海峡にまたがる所領を形成した。こうしてノルマンディーの支配者層がイングランドに拡大し、イングランドとノルマンディーで同質の貴族層を形成することとなったのである。[14] さらに、彼らはクロス・チャネル・エステイトをあわせて維持相続しようとする傾向が強く、また分割相続することになっても、後の世代で再び統合されることが多かった。[15] これはイングランドとノルマンディーに分家しても、親族としてのつながりを強く持ち続けたことを表している。[16] ウィリアム征服王の世代以降も大陸出身の貴族がイングランドに所領をえる例は存在し続け双方に所領をもつ貴族たちは再生産されていくのである。[17]

以上のような、ル＝パトゥーレルの主張する「ノルマン帝国」論にもとづく見解では、イングランドとノルマンディーで同質の貴族層が成立したということを双方の同化・求心性の論拠の一つとしてあげていた。しかし、ベイツ、グリーンはこの点についてもいくつかの疑問点を提示している。

まず、ノルマン＝コンクェストに参加したのは確かにノルマンディーの有力者たちであり、ウィリアム征服王の側近であった大貴族たちが多いが、[18] ノルマンディー以外からも大勢が参加しており、貴族の次男、三男といった、父親の所領がえられる見込みの薄い人々なども多数参加し、征服者ノルマン貴族自身がすでに雑多な集団であった。[19] この事実は、ノルマンディーの貴族層がそのままイングランドに拡大したわけではないことを意味する。また、クロス・チャネル・エステ

イトの維持にかかわる所領の相続に関しては、ル＝パトゥーレルは当時のアングロ＝ノルマン貴族たちがイングランドとノルマンディーの所領をあわせて一人に相続させる傾向を強調しているが、実際には息子が複数いれば分割して相続させることも多かったとみられる。[20] また、ル＝パトゥーレルは一度分割された所領が再統合される事実を指摘するが、イングランドとノルマンディーの分家のそれぞれに嫡子がいれば、それぞれに継承されていく例がみられる。[21] これらの状況から、アングロ＝ノルマン貴族たちが、つねに双方の所領をあわせて保有しつづけようという志向をもっていたとは考えられない。ベイツ、グリーンは以上の点をあげて「同質の貴族層」を批判する。

ここで、アングロ＝ノルマン貴族たちの立場にたって彼らの所領との関係を考察してみよう。実際にイングランドとノルマンディーに所領をえた貴族たちは様々な問題を抱えることになったと考えられる。たとえば海をはさむという物理的障害をこえて所領を保持し続けることが実際にどの程度可能であったか。そしてまた、その困難以上にどのようにイングランドとノルマンディーを合わせ持つメリットが存在したのだろうか。自己の権力を確実に積み重ねていくためには、軍事的基盤である城を持ち所領をある程度集中させていかねばならない。とくに、戦争状態など不安定な状況ならば、隔たったしかも海をこえた場所にある所領を維持するよりも、どちらかの地域に集中させていくほうが合理的ではなかったか。他方、ノルマン貴族たちがたとえ海の彼方にでも所領を得ることを望んだことは、彼らが自己の家産の維持拡大を常に念頭におかなければならなかったことから理解できよう。この矛盾した状況において、たとえば主君同士の対立といったように所領を失う危険にさらされたとき、貴族たちはどのような対応をせまられたのだろうか。この問題については実際の争乱状況において、貴族たちがどのように反応したかを検討する必要があろう。

ところで、これまで述べてきたようなアングロ＝ノルマン王国論からみた当時の貴族たちについての視角には、やや議論が錯綜した面がある。つまり、イングランドとノルマンディーの双方に所領を持つ貴族たちが存在し、イングランドとノルマンディーで同一の主君を望み、両方の統一を志向したことから彼らがイングランドとノルマンディーで同質の支配

層を構成したことが一元的に連続すると考えられていることにはいささか疑問が残る。イングランドとノルマンディーが密接につながっていることと、両者が均質であることは必ずしもイコールで結ばれるわけではないにもかかわらず、議論のうえで同次元で扱われている。われわれは、アングロ＝ノルマン王国を考察するうえで、イングランドとノルマンディーという二つの地域が、ある時期から一人の君主によって統治されたという事実にもたらされた同化と相違性の両方の存在を理解した後、双方のつながりを改めてとらえ直す必要があるだろう。

これらの論点をふまえたうえで、前述したように、支配者層であった貴族たちに注目するならば、彼らが実際に統治の側面においてどのように活動していたのかを具体的におってみなければならない。当時の貴族層については、近年盛んに研究が行われているが、その中心は、王を頂点とした貴族間のネットワークと統治をめぐる問題である。つぎに、現在のアングロ＝ノルマン貴族研究をまとめておこう。

イングランドとノルマンディーを再びあわせて手にしたヘンリ一世治世は、のちのアンジュー時代のヘンリ二世治世に飛躍的発展を見せた各種の行政機構が初めてその原型を現した時代であった。すなわち、王の不在時に行政を担う行政長官、財務府、裁判組織の制度化など君主の家政組織と在地行政機構が分化し、発展してゆくという特徴である。[22] 単に双方の地に所領を持っていたかどうかという所領保有の面からのみではなく、この実際的統治行政に関わる貴族たちという点にも注目する必要がある。

アングロ＝ノルマン時代においては、行政はすぐれて人格的な側面が強く王とパーソナルなつながりを持つ人々のネットワークによって担われていたことが最近強く主張されている。行政機構の制度的発展のみではなくそれらを支えた人的構成に注目し、ヘンリ一世による人材登用を指摘したのはサザーン（R. W. Southern）であった。[23] 同氏は、オルデリクス・ヴィターリスによる著作「教会史」[24]のなかの記述を引用しながら以下のように述べている。ヘンリ一世はパトロネジを行政システムに組み入れることにより、行政機構内部に中下層貴族を登用し中央・地方の統治をまかせていった。ヘンリ一

世により新たに登用された人々は、従来のような大所領を保有し封建的諸特権により強い権力を行使するような大バロン層ではなく、権力、財産のほとんどを王のパトロネジに依存せざるをえないような中下層貴族であった。彼らは王に依存するがゆえに王権に忠実であり、その手足となって王に奉仕したのである。サザーンはこのような人々を「新人」と呼ぶ。[26] この「新人」登用論は、行政機構を支える人的構成に注目したものとして学界に強いインパクトを与えたが、その後、グリーン、ウォーカー（B. M. Walker）らによってさまざまな修正的見解が出されている。すなわち、有力貴族たちは決してないがしろにされたわけではなく、[27]「新人」もオルデリクス・ヴィターリスの嘆くほど下層出身者ではなかったという事実、[28] また、新人登用を行った君主はヘンリ一世だけではなく、彼が最初でもなかったという事実が指摘された。[29] 結局、ヘンリ一世の旧来の大貴族層に新人たちが入れ替わり、大貴族に対抗する「新人」貴族という構図は見直されているといえる。現在では、ヘンリ一世治世においては、たとえ大貴族として封建的諸特権を行使し軍事力によって奉仕することができなくとも、行政面において王に忠実に奉仕することによりあらたな所領、収入の多い官職や富裕な女相続人との結婚といったパトロネジを得て財産と権力を蓄積し上昇していくことが可能であったという当時の社会構造に焦点があてられている。[30] しかし、王のパトロネジに依存することは、反面、王の恣意によって一挙に没落する危険性も秘めていた。さらに「新人」の特徴であったこの上昇と没落の過程は大貴族家系にもあてはまるとする見解もあり、当時の社会的流動性そのものを問題にする方向に視点が移っているといえよう。[31]

これらの議論を背景に、本論にはいる前に問題の所在をまとめておこう。

まず、アングロ＝ノルマン王国の実態を考察するために王と彼をとりまく貴族たちを視角の中心に設定する。アングロ＝ノルマン王国論での、イングランドとノルマンディーの密接なつながりを重視する見解においては、そのひとつの根拠としてイングランドとノルマンディーで同質の貴族層が成立したと主張された。しかし「イングランドとノルマンディーの密接なつながり」と、内部の貴族たちの実態は分けて考察しなければならない。ここでは史料の関係から彼らを集団

的に扱い、その行動を検討することにより、アングロ＝ノルマン王国における貴族たちを立体的に把握する事を試みる。はじめにウィリアム征服王の死によってアングロ＝ノルマン王国が分裂した状況からそれを再建したヘンリ一世治世の終わりまで、イングランドとノルマンディーをめぐる争乱のなかで貴族たちがどのように行動したか、彼らの所領とのかかわりを視野にいれつつ考察する。アングロ＝ノルマン時代の貴族たちにおけるイングランドとノルマンディーのつながりにたいする意識は、まず、イングランドとノルマンディーの分裂の危機――それは常に君主同士の争いに併発した――に際してどのように行動したかに表面化すると考えられるからである。一方、争乱という事件的様相のみではなく、王の統治をささえた貴族たちの活動にイングランドとノルマンディーという両地域がどのようにかかわったかを役らの所領保有と活動領域の両側面から検討を加える。なお、この点については史料上の制約もありヘンリ一世時代にしぼって検討することになる。また、前述した当時の貴族社会における社会的流動性という特徴も考慮しなければならないであろう。

① イングランドとノルマンディーの関係の重要性についてはダグラスがすでに指摘している。Douglas, D. C., *Norman Fate 1100–1154*, London, 1976.

② Le Patourel, *Norman Empire*, id. "Normandy and England 1066–1144", 1970, in id. *Feudal Empires: Norman and Plantagenet*, London, 1984, (*Empires* と略記); 富沢霊岸『イギリス中世国制史の研究』二四四頁、関西大学出版広報部、一九七八年。

③ Le Patourel, "Normandy and England 1066–1144" p. 4, id. "France and England in the Middle Ages" in: *Empires* p. 4 f.; id. *Norman Empire*, p. 13 ff.

④ Le Patourel, "Normandy and England 1066–1144" p. 19; id. *Norman Empire*, pp. 244–5.

⑤ Le Patourel, "The Norman Succession 996–1135", *E. H. R.* 86, 1971; id. *Norman Empire*, pp. 179–200.

⑥ Hollister, C. W., "Normandy, France and the Anglo-Norman Regnum" pp. 17–58, 1976; "The Rise of Administrative Kingship: Henry I" pp. 223–246, 1976, in: C. W. Hollister, *Monarchy, Magnates and Institutions in the Anglo-Norman World*, London, 1986 (*Monarchy* と略記) 王・公の権威については＝ベトゥールも同様の見解。Le Patourel, "Norman Kings or King/Dukes?" pp. 469–479, in: *Droit privé et institutions regionales etudes historiques offertes à Jean Yver*, Paris, 1976.

⑦ 以下は主に Bates, D. R., "Normandy and England after 1066", *E. H. R.*, 104, 1989; Green, J. A., "Unity and Disunity in the Anglo-Norman State", *B. I. H. R.*, 62, 1989 による。

⑧ Green, "King Henry I and the Aristocracy of Normandy" p.

161, in: *La 'France anglaise' au Moyen Age*, Paris, 1988.

⑨ 「同質の貴族層」については後述。

⑩ その他には Loyn. H., "1066; should we have celebrated?", *B. I. H. R.*, 63, 1990; Holt, J. C., "John Le Patourel", *Proceedings of the British Academy*, 71, 1985.

⑪ 有光秀行「二人の年代記作者はイングランドとノルマンディーをいかにとらえたか——オルドリク・ヴィタルとウィリアム・オヴ・マームズベリの場合——」史学雑誌、一〇〇編、一九九一年では年代記作者の著作からアプローチを試みる。

⑫ 日本におけるアングロ＝ノルマン王国論の紹介については、まず、佐藤伊久男「前期プランタジネット朝の歴史的地位——イングランド『国民国家』形成史論覚え書」吉岡昭彦編『政治権力の史的分析』、一九七五年、御茶の水書房、七七—一〇四頁があげられる。ほかには、城戸毅、『マグナ・カルタの世紀』、東京大学出版会、一九八〇年、富沢霊岸、前掲書、山代宏道「アングロ—ノルマン国家再考」史学研究、一八三、一九八九年、有光秀行、前掲論文、福田 誠（訳）「タグラス「ノルマン征服と英国の歴史家たち」、就実論叢（社会篇）、二二号、一九九二年など。

⑬ アングロ＝サクソン貴族たちがノルマン＝コンクェストによって根絶されたとする説には異論がある。

⑭ Hollister and Keefe, T., "The Making of Angevin Empire", *Journal of British Studies*, 12, 1973, p. 2 ff; Hollister, "Normandy France and Anglo-Norman Regnum" p. 209; Le Patourel, "France and England in the Middle Ages" p. 3.

⑮ Le Patourel, "Normandy and England 1066–1144" p. 7. たとえば Roger de Montgomery の息子 Robert de Bellême は父のノルマンディー後、その所領を得て父の領土を再構築する。

⑯ Le Patourel, "Norman Barons" in: *Empires* p. 13, pp. 27–8. ルー＝パトゥーレル以外にも Chandler, V., "The Last of Montgomerys; Roger the Poitevin and Arnulf", *B. I. H. R.*, 62. 1989; Newman, C. A., *The Anglo-Norman Nobility in the Reign of Henry I*, Philadelphia, 1989 (*Anglo-Norman Nobility* と略記) p. 49; Boston, E. J. R., "The Territorial Interests of the Anglo-Norman Aristocracy, 1085–1135", Unpublished Ph. D. Thesis, Cambridge, 1979, p. 35 など。

⑰ Le Patourel, *Norman Empire*, p. 108 ff.

⑱ Hollister, "The Greater Domesday Tenants in Chief", in: J. C. Holt ed. *Domesday Studies*, Boydell Press, 1987, pp. 219–248.

⑲ Douglas, D. C., *William the Conqueror*, London, 1964 Rep. 1990, p. 191.

⑳ Holt, J. C., "Politics and Property in early Medieval England" *Past and Present*, 57, 1972, ("Politics and Property" と略記)

㉑ Holt, "The Notions of Patorimony", *T. R. H. S.*, 33, 1983, p. 212; id. "Politics and Propery" pp. 12–16. ルーパトゥーレルが当時の相続慣習は不分割の方向へと向かったと主張しているのに対し、ホールトは獲得家産と相続家産の区別とそれぞれを分けて相続させる例を指摘する。相続慣習はさだまっておらず、不確定の要素が強いと考えられる。また、Boston *op. cit.* に示された貴族たちの所領保有の移動をたどっていくと、ノルマンディー、イングランドのそれぞれの所領を長子、次子分割相続させた例は多い。ヘンリ一世時代については DeAragon, R., "The grouth of secure inheritance in Anglo-Norman England", *Journal of Medieval History*, 8, 1982. ルーパトゥーレルの問題としたウィリアム征服王の遺産分配については、

English, B., "William the Conqueror and the Anglo-Norman Succession", *B.I.H.R.*, 64, 1991.

㉒ ヘンリ一世のもとでは、王の宮内府とは別に在地行政機構が整備された。まず、王の不在時に行政を統括する行政長官（Bates, "The Origins of the Justiciarship", *Anglo-Norman Studies*, 4, 1981.）そのもとに財務府がおかれ、イングランドでは州長官としてのシェリフが王の地方支配を管理した。そして、王の訴訟を裁く裁判官がおかれ、イングランドでは巡回裁判が行われた。（青山、前掲書、二二四、二二五頁）

㉓ Southern, R. W., "The Place of Henry I in English History" *Proceedings of the Brtsh Academy* 48, 1962.

㉔ 本稿では Chibnall, M. ed. and tr. *The Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*, 6vols, Oxford, 1968–1980 をつかう。（以下 O. V. と略記）

㉕ Southern, *op. cit.* p. 130 ff.

㉖ 佐藤伊久男「集権的統治の構造――一二世紀前半のイングランド――」西洋史研究、新輯一号、一九七二年、一五頁では、ヘンリ一世が封建的諸権利を行使して新人にパトロネジを与え専制統治を可能にしたとする。富沢霊岸「一二世紀イングランドと王のパトロネジ」関西大学文学論集、四〇、一九九一年では、ヘンリ一世のパトロネジネットワークに注目する。

㉗ Walker, B. M., "King Henry I's Old Men", *Journal of British Studies*, 8, 1968.

㉘ Green, *The Gouvernment of England under Henry I*, Cambridge, 1986, chap. 7 (*Government* と略記)

㉙ Green, *op. cit*, Walker, *op. cit.* p. 20. また、サザーンもヘンリ一世が新人登用を初めて行ったと主張しているわけではない。ウィリアム二世についても彼の父王時代の有力貴族たちではなく彼にへつらうものたちを優遇したという記述がみられる。O. V. vol. 5, p. 202.

㉚ Green, *op. cit*, pp. 43, 156 f., 193; Mason, E., "Magnates, Curiales and the Wheel of Fortune; 1066–1154", *Proceedings of the Battle conference of Anglo-Norman Sudies*, 2, 1979, p. 118, 129; Turner, R. V., *Men Reised from the Dust-Administrative Service and Upward Mobility in Angevin England*, Philadelphia, 1988, p. 2 f.; Newman, *Anglo-Norman Nobility*, p. 17, 108, 121; DeAragon, "In Pursuit to Aristocratic Women; A Key to Success in Norman England", *Albion*, 14, 1982; Mooers, S. L., "Network of Power in Anglo-Norman England", *Medieval Prosopography*, 7, 1986; id. "Familial Clout and Financial Gain in Henry I's Reign", *Albion*, 14, 1982.

㉛ 貴族そのものをどうとらえるかという問題も問い直されるようになっている。なにをもって「新人」「大貴族」とするかも研究者により異なる部分があり、「新人」「大貴族」と区別を固定してとらえるのではなく、彼らの個々の経歴を具体的に積み重ねて行く研究も盛んになっている。Chandler, "Family Histories; an Aid in the Study of the Anglo-Norman Aristocracy", *Medieval Prosopography*, 6, 1985. など

二　アングロ＝ノルマン貴族の活動

（一）分裂時代

本節では当時の貴族たちがその王国の分裂の時代に起こした反乱を中心に、ウィリアム征服王統治下のアングロ＝ノルマン王国時代からヘンリ一世がイングランドとノルマンディーを再び合わせ持つようになる一一〇六年以前の争乱について考察する。

ウィリアム征服王はアングロ＝ノルマン王国の成立後、数年間は反抗するアングロ＝サクソン貴族を鎮圧する戦闘に忙殺される。また、こうしてウィリアムがイングランドに滞在している間にノルマンディーを預けられていた長男ロベールが父に対して反乱を起こす。[1] これは鎮圧されたが、ロベールは追放されウィリアム王の生存中に両者が和解することはなかった。やがて征服王の死によりアングロ＝ノルマン王国は分裂する。征服王時代の争乱では、イングランドにおける被征服者側であるアングロ＝サクソン人貴族対征服者側のノルマン人貴族の争いという傾向が強かったと考えられよう。ロベールの反乱はノルマンディーの実質的支配権を得るためだったとされるが示唆されるにとどまる。

一〇八七年にウィリアム征服王が亡くなると、ノルマンディーは長男ロベールに、イングランドはその弟ウィリアムにと分割して相続されることとなった。[2] このようなアングロ＝ノルマン王国の分裂の危機に際しイングランドとノルマンディーの関係についての貴族たちの意見が表面化すると考えられるが、一〇八七年のこの事態に対する貴族たちの反応についてオルデリクス・ヴィターリスは以下のように述べている。[3]「我々はどうしたらよいのだろう。今や我々のかつての主君はなくなり二人の若者が後をついだ。そして、彼らはイングランドの統治とノルマンディーの統治を分けてしまった。どうしたら我々は二人の互いに異なり、離れてすむ主君にうまく仕えることができるだろうか。もし我々がノルマンディー公に仕え、この兄弟ウィリアムに対抗すれば、イングランドの大変豊かで貴重な所領を取られてしまうだろう。逆にウ

ィリアム王によくつかえれば、ロベール公はノルマンディー内の我々の父祖伝来の地を取り上げてしまうだろう。この主君たちのもとで、このような分裂が我々に起こらぬように注意しよう。」この部分はアングロ＝ノルマン王たちのもとでイングランドとノルマンディーに所領を合わせ持つ貴族たちが双方に共通の主君を望んだという事実を端的に示しているといえる。

一〇八八年ウィリアム二世がイングランド王位を継承した後、イングランドで彼に対する反乱が起こった。それには、Odo bishop of Bayeux, Robert of Mortain, Roger of Mowbray, Gilbert fitzRichard of Clare, Geoffrey of Coutances, Eustace count of Bourogne など、ウィリアム征服王の側近であった貴族たちが多数参加していた。[4] 彼らは、征服によりイングランドに所領を得ることになったノルマン貴族たちの中でもぬきんでて大所領を保有しており、ノルマンディーにおいても大所領をもち半独立的なほどの勢力を誇っていたような、以前から公の側近であった有力者たちだった。[5] ウィリアム・オブ・マームスベリによれば、彼らは扱いにくいウィリアム二世よりも性格の柔弱なロベールを支持したというのである。[6] また、オルデリクス・ヴィターリスは、この反乱を首謀したとされる Odo of Bayeux が、長子であるロベールによってイングランドもノルマンディーもあわせて統治されるべきだと主張してウィリアム二世排斥の反乱を導いたと伝える。この反乱は結局鎮圧され参加者には多額の罰金が課されることとなった。[7][8] ところが一〇九五年にも再度ウィリアム二世に対する陰謀が発覚し、しかも一〇八八年の反乱者の子孫たちが多くその加担者となっていた。[9] 今回は王は態度を硬化させ彼らのイングランドの所領を厳しく没収したのである。[10] このように、父の時代の大貴族たちの反乱に悩まされたウィリアム二世は彼の周辺にはそのような大貴族たちをおかず、また、貴族たちが大勢力をもてるほど所領を集積しないように警戒していた。[11] 以上の出来事は、反乱の失敗によってイングランドにもノルマンディーにも所領をもつ貴族たち、つまりクロス・チャネル・エステイトを持っていた大貴族たちのうち、そのトップ・クラスがイングランドの所領を失い「同質の支配層」から脱落していったことを意味しよう。そのうえ、ウィリアム二世は、その後を再び同様の

大貴族でうめることはしなかったのである。

ところが、一〇九六年、ロベールは第一回十字軍に参加するために、ウィリアム二世に莫大な金額を払わせて自身の不在の間のノルマンディーの統治を彼にゆだねた。[12] こうして、ウィリアム二世により再度イングランドとノルマンディーが一人の君主のもとにおかれることになる。しかし、わずか数年後の一一〇〇年、ロベールが十字軍から帰る直前にウィリアム二世は事故でなくなり、直後に末の弟のヘンリがすばやくイングランド王位を手に入れてしまった。[13] ノルマンディーに戻ったロベールはそれを非難し、イングランド侵攻をめざす。一一〇一年にはロベールを支持してのヘンリに対する大規模な反乱が起こった。[14] 争乱の後、一一〇六年、タンシュブレーの戦いにおいてヘンリ一世はついに兄であるノルマンディー公ロベールをとらえ、ノルマンディー公領をも支配下におさめることとなった。[15]

この間の争乱に際し貴族たちはそれぞれの陣営につくにあたり、敵側地域における自身の所領の喪失の危険を覚悟しなければならなかった。実際に、ウィリアム二世とヘンリ一世はロベール側に与した貴族たちのイングランドの所領を厳しく没収している。ボストン（E. J. R. Boston）と、ムーアス（S. L. Mooers）はこの間の争乱をめぐって、ヘンリの側についた貴族たちとロベールの側についた貴族たちについて彼らの所領を分析している。それによれば、この時期の反乱においてはヘンリ一世はイングランドにもノルマンディーにも所領を持つ貴族たちの支持を受けている。また、ヘンリを支持した貴族たちのノルマンディーの所領の多くはノルマンディー西部、つまり、ヘンリが父征服王から譲り受けた遺産でもって兄ロベールから得た地域に位置していた。一方ロベールを支持した貴族たちの中ではノルマンディーにのみ所領を保有していた人々が次第に中心になっていったのである。[16] つまり所領の安全を願った貴族たちがヘンリの優勢をにらんでアングロ＝ノルマン王国の再建を期待し、その支持にまわったと考えられるのである。[17]

以上、ヘンリがアングロ＝ノルマン王国を再建するまでの兄弟間の争いにおいてはクロス・チャネル・エステイトを保有する貴族たちが一人の君主を望んでいたと考えられることが確認できた。君主の側の意図についてもオリデリクス・ヴ

ィターリスには、ヘンリ一世ら三人の兄弟たちが互いの領土に侵攻するにあたって、それぞれが「イングランドもノルマンディーもどちらも保有すべき」と主張したと述べられている。[18] しかし一方ウィリアム二世、ヘンリ一世らが自身に対抗する貴族たちのイングランドの所領を没収していったことから、ノルマンディーにのみ所領を有することになった貴族たちの存在が指摘されよう。

これ以降のアングロ＝ノルマン王国における争乱は、イングランドのウィリアム二世対ノルマンディー公ロベール、あるいはイングランドのヘンリ一世対ノルマンディー公ロベールという構図をはなれ新たな展開を示すことになったと考えられる。この分裂している時代の争乱と、ヘンリ一世により再統合された時代以降の争乱には貴族たちの行動やその性格に違いがみられるのだろうか。つぎに、ヘンリ一世時代の争乱にあたってみることにしよう。

（二）ヘンリ一世時代における争乱

ヘンリ一世時代については、イングランドではめだった反乱の叙述は残っていない。[19] 一方、これと対照的にロベール公治下におけるノルマンディーについては公権力の弱体化と貴族間での私戦が頻発していた事実が述べられ、ヘンリがノルマンディーを統治するようになった後も争乱の記述は繰り返し登場している。[20]

ヘンリ一世時代のノルマンディー貴族たちに注目したのはグリーンである。[21] 同氏によれば、ヘンリ一世治下のノルマンディーにおいては大体三回と考えられる混乱状況があった。混乱の期間は第一期が一一一一年から一一一三年頃、第二期が一一一八年から一一一九年頃、ヘンリのノルマンディー支配がもっとも危うくなったときであり、第三期が一一二三年から一一二四年頃と考えられている。それぞれの争乱のおおよそを説明すれば以下のようになる。[22]

まず、第一期は一一〇八年にフィリップ一世を継いで即位したルイ六世が王権の拡大をめざしてオマージュを要求したことにヘンリが対立したためだが、[23] 一一一三年までにヘンリは有利に和を結んだ。[24] この間、アンジューではフルク五世が

伯位をつぎ、フランドルではアングロ＝ノルマン君主たちと友好的だったロベール二世にかわりボードワン七世がフランドル伯となる。第二期は、ヘンリにとらえられ軟禁状態にあったヘンリの兄ロベールの息子のギョーム・クリトーが逃亡しフランドル伯のもとへ逃げ込むという事件が起こり、[25] フランドル伯側との全面的な戦いとなったものであった。フランドル伯はクリトーがノルマンディーの正当な支配者であるとして彼を支援しヘンリと対抗する。この時期にはフランス王ルイ六世、アンジュー伯フルク、フランドル伯ボードワンを敵にまわし、かつノルマンディー内でも貴族たちの反乱が続きヘンリは苦しい立場に追いこまれた。[26] 結局、ヘンリはアンジュー伯の娘と自分の一人息子ウィリアム・エセリングを婚約させることによってアンジュー側と和を結ぶ。[27] ルイ六世は最後までクリトーをたてて戦うが一一一九年の戦闘でヘンリに破れ、ヘンリはルイに自分のノルマンディー支配を認めさせることができた。[28] 彼はまたノルマンディー内の反乱貴族たちをおさえて混乱を収拾する。[29] ところが婚約直後の息子の事故死によりヘンリのアングロ＝ノルマン王国は後継者を失うこととなった。[30] 同時にアンジュー伯との和議は崩壊し、再びロベールの息子ギョーム・クリトーを支援するフランス王、アンジュー伯らと対立することになってしまうのである。[31] しかし、この第三期は前回ほど危機に直面することはなくやがて一一二八年ギョーム・クリトーは死に、ヘンリの支配は安定期を迎えた。[32]

さて、これら対立のそれぞれに乗じてノルマンディーの貴族たちが多数ヘンリに対抗している。彼らヘンリに対抗したと考えられる貴族たちにはどのような特徴がみられるのであろうか（表1を参照）。できるかぎり具体的な人名をあげたうえで、まず、彼らヘンリに対抗したような貴族たちがヘンリの発給した特許状でどれほど認証していたかを調べると、イングランドにおいてよりもノルマンディーにおいてより多く認証していることがわかる。[33] イングランドにおいて発給されたと考えられる特許状がノルマンディーのそれよりも多いことを考慮すればこの傾向はよりはっきりとしていたととらえられるだろう。また、ボストンのあげている彼らのイングランドとノルマンディーの土地保有の比較を示す記号を参照すると、特に争乱の後半期になると、所領がノルマンディーに集中している人々が中心になってくるという傾向が確認され

表1　反　乱　貴　族

1　　期	2　　期	3　　期
Robert de Bellême : N	Amaury de Montfort : N	Amaury de Montfort
William Talvas : N	Hugh de Gournay : a/N	c. Evreux : N
William c. Evreux : a/N	Stephen d'Aumale : A/n	Waleran c. Meulan : a/N
William Crispin : N	Eustace de Breteuil : N	Hugh de Montfort : N
Helias de St. Saens : N	Richer de Laigle : ?	Hugh fitzGervase : N
Philip de Briuoze : A/n	Robert de Neufburg : N	Payn de Gisors : N
William Malet : A/n	Henry c. Eu : A/N	William Crespin : N
William Baynard : A/n	William Talvas c. Ponthieu : ?	William de Roumare : N
Roger d'Abetot : a/n	Helias de St. Saens : N	
Robert de Lacy : A/n	William Crespin : N	
	Robert Giroie St. Ceneri : N	
	Hugh de Chateauneuf : N	
	Rainald de Bailleul : a/n	
	William Pointel : n	
	Richard and William Fresnel : n	

反乱にかかわった貴族たちでヘンリの特許状に認証している人々

名　　前	土地	ノルマンディーで発給されたもの	イングランドで発給されたもの	不　明
Amaury de Montfort	N	1		
Ascelin Goel	N	2		
Hugh de Gournay	a/N	2	3	
Philip de Braose	A/n	1		
Richer de Laigle	?	2		
Robert Giroie	N	1		
Robert de Lacy	A/n	1	1	
Robert de Neufburg	N	5		
Stephen d'Aumale	A/n	3	4	
William Malet	A/n		6	
William Talvas	?	4		
William c. Evreux	a/N			1
William de Roumare	N	2	1	

A；イングランドに大所領　　a；イングランドに小規模の所領
N；ノルマンディーに大所領　　n；ノルマンディーに小規模の所領
E；イングランドにのみ大所領　　c.；count
ANF；イングランドとノルマンディーの双方に所領を持つ家系
（出典）Boston, "Territorial Interests" chap. 2
Green, "King Henry I and the Aristocracy of Normandy" より作成

る。[34] さらに、彼らの勢力基盤と考えられる城の位置を地図上にあらわしてみよう（図1を参照）。すると、それらがアンジュー、フランスなどヘンリの対抗勢力圏に接する地域に集中していることがわかる。一方ヘンリがノルマンディー内の争乱期においても権力を維持し続けられた地方はノルマンディーの西部地方、コタンタン半島地域であり、そこは兄のロベールがノルマンディー公であった時代にヘンリが父征服王から譲り受けた財産でもって兄から得た地域であった。[35]

以上述べてきたことをまとめてみよう。まず、反乱を起こした貴族たち、反対にヘンリ一世の側についた貴族たちの基盤とした地域にかたよりがみられる。ヘンリの側についたものたちは、ヘンリの古くからの勢力基盤となっていたノルマンディーの西部地方を中心としていた。一方、ヘンリに対して反抗的だった貴族たちはノルマンディー公領の周辺部に基盤を持っており、その事実はノルマンディー公領を囲むほかの諸権力との関係が重要であったことを意味する。争乱のそれぞれにおいてつねにフランドル伯、アンジュー伯、フランス王などが関わっており、彼らの言い分はノルマンディー公ロベールの息子ギョーム・クリトーにノルマンディーの正当な支配権を回復するためというものであった。[36] ここでは、オルデリクス・ヴィターリスはクリトーがヘンリ一世たちのようにイングランドもノルマンディーも合わせ持つべきだと主張したとは述べていない。

また、このようなイングランドの平和とノルマンディーの争乱状態の要因の一つとして、双方の土地保有の性格の違いが考えられる。イングランドにおいては征服後、イングランドの土地を貴族たちに分配する際に王権のイニシアチブが強く作用し、ある地域にある貴族の所領が集中的に保有されることのないよう広く分散して与えられた。また、所領の世襲

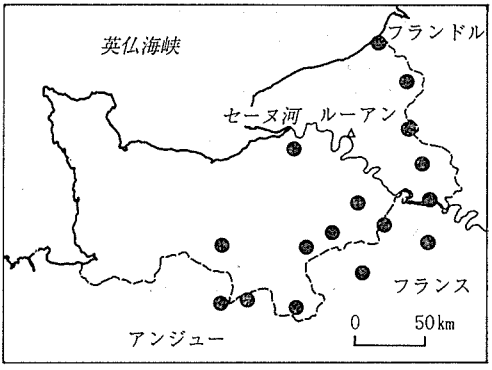


図1　反乱貴族たちの勢力基盤

慣行がまだ定着するにいたってはおらず所領保有の移動に際しては王権が介入しやすかったという事実がある。こうして、イングランドにおいては貴族たちは所領や権力を集中して累積し特定の地域に根ざした勢力基盤を成立させることが難しく、王権に反旗を翻すほどにはいたりにくかった。また、イングランドではノルマン人貴族たちは征服者として少人数で多数のアングロ＝サクソン人被征服者たちを治めなければならないという事情のために征服者側としての団結が必要だったと考えられる。[37] しかし、ノルマンディーにおける事情はイングランドのそれと異なっていた。ノルマンディー公領においてはほかの大陸の諸侯たちに比べれば公に権力が比較的よく集中していたことが指摘されているが、[38] ウィリアム征服王がノルマンディー公位につく前後の一〇二五年から一〇五〇年頃の混乱期、またロベール公治世下の公権力の弱体化に並行しての混乱の中で貴族たちはそれぞれの地域に密着した強固な勢力基盤を形成することができた。こうしてノルマンディーの貴族たちには独立性を強く維持する伝統がつくられていたのである。ノルマンディーにおける争乱の背景として周囲の諸権力との関係のほかにこのようなノルマンディーの社会的性格を考慮しなければならないだろう。

ここで、アングロ＝ノルマン王国の分裂時代の反乱とヘンリによる統合以降の反乱との二段階に分けて検討してきたことをまとめておこう。

オルデリクス・ヴィターリスの叙述の中には、ノルマン貴族たちが「二人の主人に仕えることはできない」と悩んだという文言がたびたびでてくるが、[39] これが聖書に由来する文言であることや中世社会においては複数の主人を持つことが実際多々あったことを考えれば、この言葉だけから、アングロ＝ノルマン王国の貴族たちすべてがイングランドとノルマンディーが一人の主君に統治されることを要求していたとすることはできない。だが、前述したようにあきらかに所領の安全のために同一の主君を望むという叙述があることは、そのように考える貴族たちの存在が意識されていたことを示すと考えられよう。[40] 事実、ウィリアム二世治世初期の反乱で没落していった貴族たちがそのような場合の顕著な例を示しているといえる。そこでは、ノルマン貴族たちは弱い主君を望みロベールを支援したが反乱は失敗した。そののちは彼らのイ

ングランドとノルマンディーの所領の安全のために、双方の地の統合の可能な君主、つまりヘンリ一世の側へと集まっていったと考えられるのである。そして、ヘンリ一世によってアングロ＝ノルマン王国が再建されてからの争乱においては、ノルマンディーの北部や東部に基盤をおきまたイングランドにあまり関わりを持たない貴族たちが中心となるのである。

では、アングロ＝ノルマン王国の均質性を主張したル＝パトゥーレルの主張に戻ってみよう。同氏の言うように、イングランドとノルマンディーの双方に所領を合わせ持っていた貴族たちで双方が一人の主君により統治されることを願い分裂に際してそれを再統合する方向に働く貴族たちは確かに存在したと考えられる。そして、君主の側ではイングランドとノルマンディーをあわせもつことによりウィリアム征服王のアングロ＝ノルマン王国再建をめざしていた。しかし、ヘンリがアングロ＝ノルマン王国を再建するまでにトップ・クラスのクロス・チャネル・エステイトを持つ貴族たちは没落する。そしてウィリアム二世もヘンリ一世も、反抗的な貴族たちのイングランドの所領を没収し忠実な家臣に分散して与えていた。[41] さらに、「イングランドとノルマンディーで同質の支配層が成立していた」という主張の中では、イングランドにはほとんど所領を持たず、イングランドに渡ることも少なく、ヘンリに反抗的であった貴族たちの存在をどのように考えるべきであろうか。彼らはノルマンディー公領内に所領を持つという点ではノルマン貴族であった。加えて、アングロ＝サクソン年代記は、ヘンリが困難な状況におちいった一一一八年に、「ヘンリ自身の臣下たちが反抗して彼を苦しめた」という記録をのこしている。[42] 前述したノルマンディーに中心をおきイングランドにほとんどつながりを持たなかった貴族たちもやはりアングロ＝ノルマン王であるヘンリの臣下とすれば、アングロ＝ノルマン王国内において貴族たちが同質の支配上層を形成していたとは必ずしもいえないことになる。また、ヘンリは常にノルマンディー西部の貴族たちによって支持されていたが、北部、東部の貴族たちは自立的傾向が強く、また、彼らは常にフランス王権やアンジュー伯といった周囲の諸権力との関係を調整して行かねばならなかった。ここからヘンリの権威がノルマンディー全体を把握しきれなかったこともうかがえるのである。

⑪ Mooers, S. L., "Backers and Stabbers; Problems of Loyalty in Robert Curthouse's Entourage", *Journal of British Studies*, 21, 1981; Hollister, "The Anglo-Norman civil war; 1101", pp. 77–96, 1973, in: *Monachy*,; Boston, *op. cit*, chap. 2,; David, C. *Robert Curthouse*, Cambridge Mass., 1920.

⑫ 前註24参照。Le Patourel, "The Norman Succession", この問題について、Tabteau, E. Z., "The role of Law in the Succession to Normandy and England, 1087", *The Haskins Society Journal*, 3, 1991.

⑬ O. V. vol. 4, p. 122.

⑭ *The Anglo-Saxon Chronicle*, ed. tr, B. Throne, new ed. 1964, Rolls Series, 23 (A. S. C と略記) A. D. 1088; O. V. vol. 4, p. 124 ff.; Hollister, "Magnates and 'Curiales' in Early Norman England", 1973, in: *Monarchy*, p. 100 f.; Boston, *op. cit*, pp. 104–111.

⑮ Hollister, op. cit. ウィリアム征服王はイングランドの所領を自分の側近たちにわけあたえたが、その結果裕福に所領を多く持つ一〇人ほどの大貴族が出現した。多くは王・公の親族にあたりノルマン＝コンクェストの際にも活躍していた。彼らは防衛の意味でイングランドの辺境部を集中してまかせられそれ以外にも広大な分散所領を持っていた。Freming, R., *Kings and Lords in Couquest England*, Cambridge, 1991, chap. 7; Corbett, W. J., *The Cambridge Medieval History*, vol. 5, p 510, Cambridge, 1926.

⑯ William of Marmesbury, *De Gestis Auglorum*, ed. by W. Stubbs, new ed. 1964, Rolls Series, 90 (W. M. と略記) vol. 2, p. 360.

⑰ O. V. vol, 4. p. 122,; Boston, *op. cit*, p. 109 f.

⑱ ただし、Odo はイングランドの所領を没収され追放されている。O. V. vol. 4, p. 134.

⑲ Robert de Mowbray, Roger de Lacy, Gilbert fizRichard of Clare, William count of Eu, Odo count of Champagne, Stephen d'Aumale, Hugh of Montgomery, Philip of Montgomery ら。O. V. vol. 4, p. 278 ff.; W. M. vol. 2. p. 372; Boston, *op. cit.*, pp. 116–119.

⑳ "Magnates and Curiales" pp. 102–104; O. V. vol. 4, p. 284; Freming, *op. cit.* p. 230.

㉑ Hollister, "Magnates and Curiales" p. 105 f.; O. V. vol. 5, p. 202 ff.

㉒ O. V. vol. 5, p. 208.

㉓ O. V. vol. 5, p. 288 ff.

㉔ O. V. vol. 5, p. 306 ff. Robert de Bellême とその二人の兄弟、William de Warenne, Ivo de Grandmesnil の名があがっている。

㉕ O. V. vol. 6, pp. 84 ff.

㉖ Boston, *op. cit.*, p. 13 f. pp. 145–7; Mooers, "Backers and Stabbers".

㉗ Boston, *op. cit.*, p. 204, 214, chap. 3.

㉘ 一一〇六年以前の争いにおいては、誰もがイングランドとノルマンディーの双方をあわせて保持したいと考えていたという記述がみられる。O. V. vol. 4, p. 180, vol. 5, p. 204, vol. 6, p. 78. なお、また、ウィリアム二世とロベール、ヘンリー世とロベールの互いの争いの間に講和が成立した時どの場合においても二人のうちどちらかが嫡子なしに亡くなったときには生き残った方が合わせ持つことにするという約束がなされている。A. S. C., A. D. 1091, 1100; O. V. vol. 5, p. 318.

㉙ イングランドについては、A. S. C., A. D. 1110. に Philip de Briouse, William Malet, William Bainard の所領が没収されたとの記

述がみられる。しかし、平和を強調する記述は、W.M., vol. 2, p. 487; O.V. vol. 6, p. 180. など。また、Green, "King Henry I and the Aristocracy of Normandy" p. 162.

⑳ O.V. vol. 4, pp. 198–214, p. 228, vol. 6, p. 32 ff. など。A.S.C., A.D. 1113, 1124, くスキンスはロベール治下の権力の弱体化について、彼がノルマンディーの一部にしか権力を推持することができなかったとする。Haskins, *op. cit.*, chap. 2.

㉑ ホリスターはクンリー世時代は、イングランド、ノルマンディーともに平和な時代であったことを強調するが、(Hollister, "Henry I and the Anglo-Norman Magnates", 1980, in: *Monarchy*, p. 171, id. with Keefe, "The Making of Angevin Empire", *Journal of British Studies*, 12, 1973, p. 5) グリーンはノルマンディーでかなり大きな争乱があったことを主張している。Green, "King Henry I and Aristocracy of Normandy" p. 162.; O.V. vol. 6, p. 200.

㉒ Green, op. cit., Hicks, S.B., "The Impact of William Clito upon the Continental Politics of Henry I of England", *Viator*, 10, 1979.

㉓ Hollister, "Normandy, France and Anglo-Norman Regnum" p. 224.

㉔ O.V. vol. 6, p. 180.

㉕ O.V. vol. 6, p. 162 f.

㉖ Hicks, *op. cit.*, p. 4 f, ; O.V. vol. 6, pp. 184–220.

㉗ O.V. vol. 6, p. 224.

㉘ O.V. vol. 6, p. 234 ff; Henry of Huntingdon, *Historia Anglorum* ed. by T. Arnold, new ed. 1965, Rolls Series, 74, p. 241 f.; A.S.C., A.D. 1119.

㉙ W.M., vol. 2, p. 496; Hollister, *op. cit.*, p. 223.

㉚ O.V. vol. 6, pp. 304–8; A.S.C., A.D. 1121.

㉛ O.V. vol. 6, p. 328 ff.; A.S.C., A.D. 1124.

㉜ Hicks, *op. cit.*, p. 21.

㉝ 君主の発給する特許状には証人として貴族たちの名前が示されるため、彼らがその場にいたと一応は考えることができる。認証の問題については後述。

㉞ Boston, *op. cit.*, p. 100. ただし、史料の関係から、すべてを正確に把握したうえでの結果でないことは留意。

㉟ O.V. vol. 4, p. 120.

㊱ O.V. vol. 6, p. 188 ff.

㊲ Freming, *op. cit.*,; Newman, *Anglo-Norman Nobility*, p. 68; Boston, *op. cit.*, p. 31. pp. 38–49; Hollister, "The Rise of Administrative Kingship" p. 223. fn. 4; Holt, "Politics and Property"; id, "Feudal Society and the Family in Early Medieval England 1; Revolution of 1066", *T.R.H.S.*, 5th. Ser. 32, 1982; Green, "King Henry I and the Aristocracy of Normandy" p. 166 f. 富沢霊岸 前掲論文三一頁。佐藤伸久男「イギリス封建制発達過程における政治権力構造——第一部〈領域的支配体制〉段階の基本的特徴」史学雑誌、七四、一九六四年。

㊳ 堀治「ノルマンディー公領の統治機構史（一〇三五）年まで」法制史研究、一一〇、一九七九年。

㊴ O.V. vol. 4, p. 12 ff., vol. 5, p. 214, p. 304, vol. 6, p. 58 ff., p. 444. など。

㊵ O.V. vol. 4, p. 122, vol. 6, p. 454.

㊶ Boston, *op. cit.*, chap. 3.

㊷ A.S.C., A.D. 1118.

三　ヘンリ一世の統治と貴族たち

前節ではアングロ＝ノルマン時代における反乱に関して貴族たちがどのように行動したかを検討した。では、反乱という事件的様相からではなく、ヘンリ一世を支持し、彼の支配を支えた貴族たちがヘンリのアングロ＝ノルマン王国統治全体を通じてイングランドとノルマンディーとにどのようにかかわっていたのかについて、特許状史料を検討することによってその傾向を探ってみよう。実際にどれほどの貴族がイングランドにおいてもノルマンディーにおいても同様に活動していたといえるのだろうか。また、彼らの活動が異なるとすれば、それはどの程度、そして彼らはどのような貴族たちだったのだろうか。本稿では、ヘンリ一世を支持し彼のもとで活動した貴族たちを検討するために、ヘンリの特許状集成 Regesta Regum Anglo-Normannorum を用い、王の発給した証書に認証者として名をのせている人物たちについて発給場所との相関関係をみることを試みる。[1] したがって、ここではアングロ＝ノルマン王国の再建された一一〇六年以降を対象にした。では、特許状史料を用いるうえで注意しなければならない問題点をあげておこう。まず、王の特許状に認証している人物たちは発給場所にいたと一応は考えることができるが、それは確実ではないこと、すべての特許状について発給場所がわかっているわけではないことなどを考慮しておかねばならない。また、イングランドで発給されたと考えられるもののほうが圧倒的に多数であることにも注意しなければならない。[2] これらの問題点から絶対的な回答は得られないが、全体的に何らかの傾向を読みとる手がかりとしたい。[3]

以下、具体的な方法を説明しよう。

まず、どの人物を取り上げるかという問題だが、これについてはアングロ＝ノルマン貴族研究を行ったニューマン（C. A. Newman）の調査を利用し、ニューマンのあげるヘンリの特許状への認証回数の多い人物たちから約八〇名を対象とした。[4] また、ニューマンはそれらの人物たちを旧来の大貴族家系、ヘンリ時代に上昇した新人たちというようにカテゴライスし

ており、そちらも参照した。前述したヘンリ時代の行政機構の発展と「新人」登用という議論を検討するためにとくに新人、大貴族とされている人々に注目する。また、ボストンによるアングロ＝ノルマン貴族たちの所領保有の研究を利用し、イングランドとノルマンディーの所領の割合を示す記号も参照する。次に数値の処理の[5]仕方を述べておこう。まず、個々の貴族が活躍した年間中にイングランドとノルマンディーにおいてそれぞれ発給された特許状のうち、どれほどの割合において認証しているかのパーセンテージを算出し、図上に点をとって示すことにした。全体のデータは表2であり、カテゴリ別に図に示したものが図2である。認証回数の全体の値をみると、四〇回代以上の二三人とそれ以下のところで大まかにわけることができ、全体の中でさらに認証回数の多いと考えられるこれらの人々を抜き出した図を示した（図3参照）。また、イングランドにおける認証頻度とノルマンディーにおける認証頻度に有意差があると考えられるひとびとを抜き出した図（図4参照）も示した。[6]

まず、認証回数のとくに多い人物たちとしては(図3)、Roger bishop of Salisbury, Ranulf Chancellor, Nigel d'Albini, Geoffrey Rufus, Robert Sigillo, Geoffrey de Clinton, William d'Albini pincerna, Robert bishop of Lincoln, William de Tancarville, Robert earl of Gloucester, Geoffrey fitzPayn らがあげられる。これら二三人のうちでは、行政家系とされる人々、新人とされる人々が数多く含まれている（二三人中一八人）。これは、王のそばに従い役職を持つなどして実際の行政を取り仕切っていた人物たちとして彼らが存在していたことを示していると同時にパトロネジを得るために王のもとに頻繁に出入りしなければならなかったという彼らの行動パターンを裏付けることにもなろう。[7] なかでもとびぬけて認証回数の多い Roger of Salisbury は、周知の通り、ヘンリ一世の片腕としてイングランドにおいて権力を振い、彼を最初の最高司法官とみるむきもあるほどである。[8] Roger がヘンリの不在時のイングランドにおける最高権力者とされていたのに対し、John of Lisieux がノルマンディーにおいてその任を果たしていたとされているが、その活動がノルマンディーにおおきくかたよっていたことはここからも確認される。また、Geoffrey de Clinton はヘンリによる

新人登用の代表とされるが、実際に認証回数のうえからもヘンリに重用されていたことがわかる。[9] 表にしめされるように新人たちの認証回数が多いことは、サザーンの主張したようにヘンリが新人たちを重く用いた事実を示すものとなるだろう。しかし、大貴族と考えられる Robert count of Meulan, William de Warenne がこのなかに含まれていることはヘンリが大貴族をすべて排斥したわけではなかったことも同時に示している。また、とくに認証回数の多い人物たちがほかの人物たちから区分されるということは、王の側近グループがごく緩やかながらも形成されていたということが確認されるのである。[10] また、イングランド中心、ノルマンディー中心、偏りなしはそれぞれ五人、七人、一一人となっている。これは、王の側近グループの中に、はっきりとイングランド中心あるいはノルマンディー中心に活動していた人物たちが存在していたことを示しているといえるだろう。また、ノルマンディーにおいて、より頻繁に認証している人物には、カテゴリー2から6のすべてが含まれている一方、イングランドの側に多い人物たちは、新人（3）と行政家系（2）のみであることにも注目される。

つぎに、全体のなかで、イングランドとノルマンディーでの認証頻度に有意差があると考えられる人物たちに注目してみよう（図4）。全体八四人のうち有意差が確認できた人物は三二人である。そのうち、九人がイングランドより、二三人がノルマンディーよりとなっている。また、そのカテゴリー別を検討してみると新人（3）、大貴族（4）、王の一族（5）にかたよりのある人物たちが多いと言うことができる。さらに、イングランドにおいて認証頻度の高い人物たちのほとんどが新人（3）であるのにたいし、そのほかのカテゴリーの人物たちはノルマンディーにおいて認証頻度が高い場合が多いのである。なかでも大貴族（4）と王の一族（5）における偏りのある認証頻度がすべてノルマンディー側となっている。この背景にはいくつかの要因が考えられる。まず、実際に大貴族たちがイングランドにゆくことが少なかったのではないかということであり、これは、ノルマン貴族がイングランドを「属領」としてとらえており、ノルマンディーを本拠地と考えていたとする見解に一致すると考えられよう。[11] また、もともとの発給数がノルマンディーにおいて少ないために

表 2

カテゴリー	名	役職	ノルマンディー	%	イングランド	%	不明	全	土地	年代
その他(1)	Adam de Port	S	0/137	0.	16/471	3.4	0/70	16	á/n	1111–1129
	Gilbert de Laigle		2/74	2.7	20/488	4.1	0/57	22	a/nA/n	1101–1123
	Roger Brus		1/176	0.6	17/854	2.0	0/103	18	A/n	1104–1133
	Walter Espec		1/76	1.3	17/464	3.7	0/53	18	?	1121–1133
行政家系(2)	Aubrey 2 de Vere		6/160	3.8	30/500	6.0	2/102	38	?	1121–1135
	Eudo dapifer		2/29	6.9	16/263	6.1	1/30	19	A/n, N ?	1100–1115
	Hamo dapifer	S da.	39/145	26.9	10/616	1.6	3/83	52	a/nANF	1100–1129
	Hugh Bigod	S	15/160	9.4	30/500	6.0	4/102	49	A/n	1121–1135
	Humphrey 1 de Bohun		5/169	3.0	13/616	2.1	3/83	21	E : ANF ?	1103–1122
	Humphrey 2 de Bohun		6/79	7.6	20/179	11.2	0/52	26	E : ANF	1131–1135
	John the Marshal		4/116	3.5	8/224	3.6	0/69	12	?	1129–1135
	Miles of Gloucester	S co.	1/160	0.6	47/500	9.4	2/102	50	:	1121–1135
	Nigel d'Albini		21/145	13.8	113/616	18.8	4/83	138	a/nA/n	1101–1129
	Nigel d'Oilli	S	0/26	0.	13/316	4.1	0/33	13	?	1101–1116
	Rabel de Tancarville		9/219	4.1	1/652	0.2	0/126	10	?	1113–1135
	Robert de Vere		17/202	8.4	34/565	6.0	0/114	51	?	1116–1135
	Roger Bigod	S	0/3	0.	18/54	33.3	1/8	19	A/n	1100–1107
	Urse d'Abitot	S	0/5	0.	5/87	5.8	0/12	5	a/n	1100–1108
	Walter of Gloucester	S	2/142	1.4	30/616	4.9	1/83	33	E	1100–1129
	William de Tancarville	cn. of N	22/145	22.6	59/616	9.6	2/83	83	a ?/N	1105–1129
	William d'Albini pincerna		21/177	11.7	64/825	7.8	8/103	93	a/nA/n	1100–1133
	William fitzOdo	co. of N	16/160	10.0	6/500	1.2	1/102	23	?	1121–1135
	Brian fitz Count	co.	18/153	11.8	16/340	4.7	1/86	35	?	1125–1135
	Eustance fitz John	ju. ?	1/160	0.1	28/562	5.0	1/75	30	A/n	1116–1134
	Geoffrey Rufus	cr.	18/153	11.8	111/641	17.3	5/82	134	?	1114–1133

新人（3）	*Geoffrey de Clin on*	S	22/226	9.7	67/741	9.0	5/132	94	A/n	1110-1135
	Geoffrey fitzPayn		29/118	12.7	42/774	5.4	4/136	75	A/n	1108-1135
	Hamo Peverel		0/145	0.	9/616	1.5	1/83	10	?	1107-1129
	John of Bayeux		6/177	3.4	19/825	2.3	1/103	26	?	1104-1133
	Payn fitzJohn	S ju.	8/207	3.9	55/644	8.5	1/123	64	?	1114-1135
	Ralf Basset	S ju.?	2/152	1.3	42/649	6.5	1/92	45	A/n	1101-1130
	Ranulf Chancellor	cr.	23/74	31.1	143/488	29.3	7/57	173	?	1107-1123
	Richard Basset	S ju.	0/159	0.	31/369	8.4	2/92	33	A/n	1126-1135
	Robert Sigillo		41/202	20.3	50/565	8.9	7/114	98	?	1116-1135
	Robert de Courcy	da., ju. of N	17/219	7.8	21/652	3.2	0/126	38	N : ANF	1113-1135
	Robert de la Haia	da., ju. of N	30/202	14.9	2/511	0.4	5/111	37	A/N	1118-1135
	Thomas 2 de St. John	S	5/100	5.0	9/527	1.7	2/60	16	A/n	1108-1127
	William 2 Mauduit		4/122	3.3	7/501	1.4	0/61	11	?	1120-1133
	William de Pont de l'Arche	S	7/177	4.0	32/825	3.9	0/103	39	?	1102-1133
	William d'Albini Brito	S ju.?	2/202	1.0	31/565	5.5	2/114	35	?	1116-1135
	William de Courcy		0/9	0.	11/175	6.3	0/13	11	E : ANF	1110-1111
	William de Haughton		1/177	0.6	12/825	1.5	0/103	13	?	1102-1133
大貴族（4）	Henry e. Warwick		0/39	0.	11/321	3.4	3/41	14	A/N	1100-1118
	Richard e. Chester		5/71	7.0	3/328	0.9	2/42	11	A/N	1101-1120
	Ranulf Meshin e. Chester		3/145	2.1	15/616	2.4	2/83	20	N-A/N	1101-1129
	Robert c. Meulan		8/39	20.5	52/321	16.2	2/41	62	A/N	1100-1118
	Robert e. Leicester		11/192	5.7	13/507	2.6	1/73	25	A-A/N	1119-1135
	Roger e. Warwick		2/159	1.3	4/369	1.1	0/92	6	E : ANF	1123-1135
	Roger fitzRichard		6/174	3.5	15/670	2.2	1/95	22	N : ANF	1101-1131
	Simon e. Huntingdon		1/9	11.1	7/175	4.0	0/13	8	E	1100-1111
	Walter 2. Giffard		6/226	2.7	2/741	0.3	0/132	13	A/N	1109-1135
	William de Warenne		27/231	11.7	39/828	4.7	2/144	68	A/n	1100-1135
王族の一	David king of Scotland				21/649	3.2	5/92	26	E	1103-1130
	Robert e. Glouces er		36/160	22.5	37/500	7.4	9/102	82	A/N	1121-1135

(5)	Stephen of Brois		8/231	3.7	10/828	1.2	4/144	23	A/N	1106–1135
	William Aetheling		6/59	10.2	9/152	5.9	1/24	16		1113–1120
高位聖職者 (6)	Adelulf / Carlisle		8/57	14.0	2/136	1.2	0/149	10	?	1133–1135
	Alexender / Lincoln		4/159	2.5	33/369	8.9	2/92	39	?	1123–1135
	Anselm / Canterbury		0/81	0.	11/110	10.0	0/13	11	?	1100–1109
	Geoffrey / Rouen		15/107	14.0	11/437	2.5	1/62	27	?	1111–1128
	Gilbert / London		0/86	0.	7/244	2.9	0/36	7	?	1128–1134
	Gundulf / Rochester		0/5	0.	4/87	4.6	0/12	13	?	1100–1108
	Henry / Winchester		0/116	0.	22/246	8.9	1/69	23	?	1129–1135
	Hugh / Rouen		14/128	10.9	3/247	1.2	1/76	18	?	1129–1135
	Jhon / Lisieux	ju. of N	53/231	22.9	10/828	1.2	6/144	69	?	1107–1135
	John / Sees		13/157	8.4	3/340	0.9	3/87	19	?	1124–1135
	Ralph / Canterbury		9/48	18.8	18/275	6.6	1/31	28	?	1114–1122
	Ranulf / Durham		4/115	3.5	22/582	3.8	4/75	30	?	1107–1128
	Richard / Bayeux		11/116	9.5	1/659	0.2	4/69	16	?	1107–1133
	Richard / London		0/100	0.	24/527	4.6	2/60	26	?	1108–1127
	Robert L. / Chester		0/28	0.	7/317	2.2	0/33	7	?	1100–1117
	Robert P. / Chester		1/67	1.5	6/199	3.0	2/31	9	?	1118–1126
	Samson / Worchester		0/12	0.	6/176	3.4	0/18	6	?	1100–1112
	Seffrid / Chichester		6/153	3.9	9/340	2.7	0/86	15	?	1125–1135
	Theowulf / Worcester		0/62	0.	6/312	1.9	0/39	6	?	1113–1123
	Walter G. / Winchester		5/145	3.5	39/616	6.3	0/83	44	?	1100–1129
	William / Canterbury		5/159	3.1	26/369	7.1	6/92	37	?	1123–1135
	William / Exeter		3/231	1.3	29/828	3.5	0/144	32	?	1104–1137
新位人聖職の高者 (7)	Audin / Evreux		29/219	13.2	4/652	0.6	2/126	35	?	1113–1135
	Bernard / St. David		13/206	6.3	37/596	6.2	4/120	54	?	1115–1535
	Nigel / Ely		3/57	5.3	7/136	5.2	0/49	10	?	1133–1135
	Robert / Lincoln	cr.	3/74	4.1	85/488	17.4	2/57	90	?	1100–1123
	Roger / Salisbury	(chief) ju.	5/231	2.2	219/828	26.4	12/144	236	?	1002–1135

Thurstan / York		21/267	10.1	40/644	6.2	2/123	63	?	1114-1135

略号）c.: count
e.: earl
（名前のイタリックは認証回数の多い人物を示す）
S : sheriff
da.: dapifer
co.: constable
cn.: chamberlain
ju.: juticiar
cr.: chancellor
（それぞれの役職の経験者を示す）
ノルマンディー，イングランド：認証した証書数／その人物が活動していた年間にイングランドあるいはノルマンディーで発給された証書数
土地：Boston, op. cit による。前章表1を参照
不明：発給地域の不明なもの
年代：その人物が活動していたと考えられる年間（ヘンリ治世内のみ）
全 ：合計（1106年ヘンリがノルマンディーを得た後から1135年治世の終わりまでの間に認証した証書の全体数）

差がより顕著に現れやすいこともあろう。[12] 一方、前述した認証回数の多い人物たちのなかだけでなく、全体の中においても新人貴族の認証頻度がイングランド側で顕著に高いということは、イングランドにおいてその行政機構の発展にこれら新人貴族が役割を担って台頭してきたことを数値的に現していると考えられるのである。これは、彼らの担った役職をみてみると、裁判官、あるいは州長官として活動した人物が多いことからも理解できる。

また、所領保有の点に注目して人物たち全体を見渡してみよう（表2を参照）。すると、前章で考察したようにヘンリ一世に対し反抗的だった貴族たちにおいては全体としてノルマンディーにより大きな所領を持つ傾向が強かったことに比べ、これらヘンリを支持していた貴族たちでは全体的にイングランドに多く所領を保有していた人々が多いことがわかる。大貴族たちについてはイングランドにもノルマンディーにも大所領を保有する人物が多くなっている。一方、行政家系貴族、新人貴族たちではイングランドに保有する所領が大きくなっているという特徴がある。ただ、興味深いことにノルマンデ

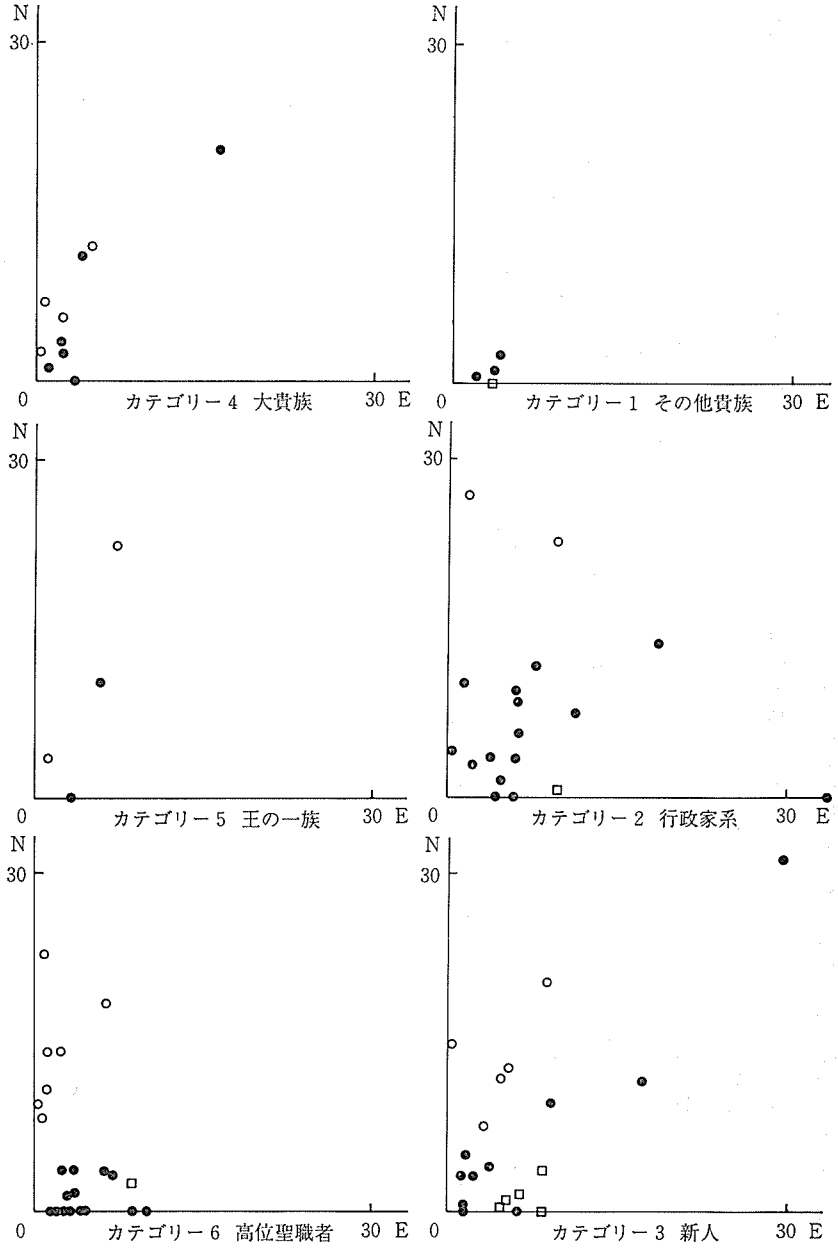
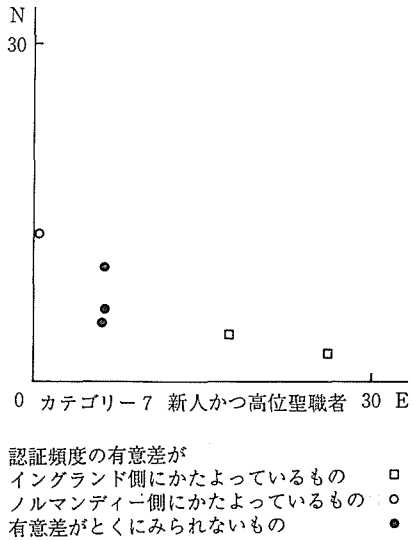


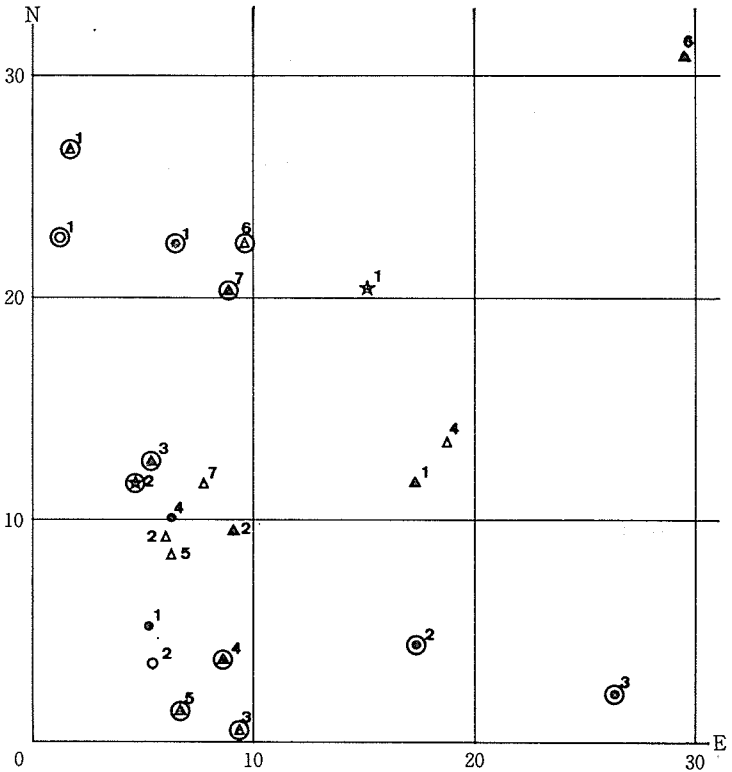
図2　カテゴリー別認証頻度分布



ィーにおいて認証回数のまさっている人物においてもイングランドの所領のほうが大きい場合があるのである。所領の大きい方がすなわち活動の中心になっているわけではない事実とともに、オルデリクス・ヴィターリスの叙述のなかに「イングランドの広くて豊かな土地」と「ノルマンディーの我らの父祖伝来の土地」という言葉があることは、彼らにとって所領の価値の要素がその大きさ以外にも存在していたという点を指摘しているのではないだろうか。これは、さきほどのノルマン貴族たちがノルマンディーを本拠地としていたという見解を裏付けるものでもあろう。

では、つぎに具体的に何人かの人物たちをとりあげてみることにしよう(表2、図2を参照)。

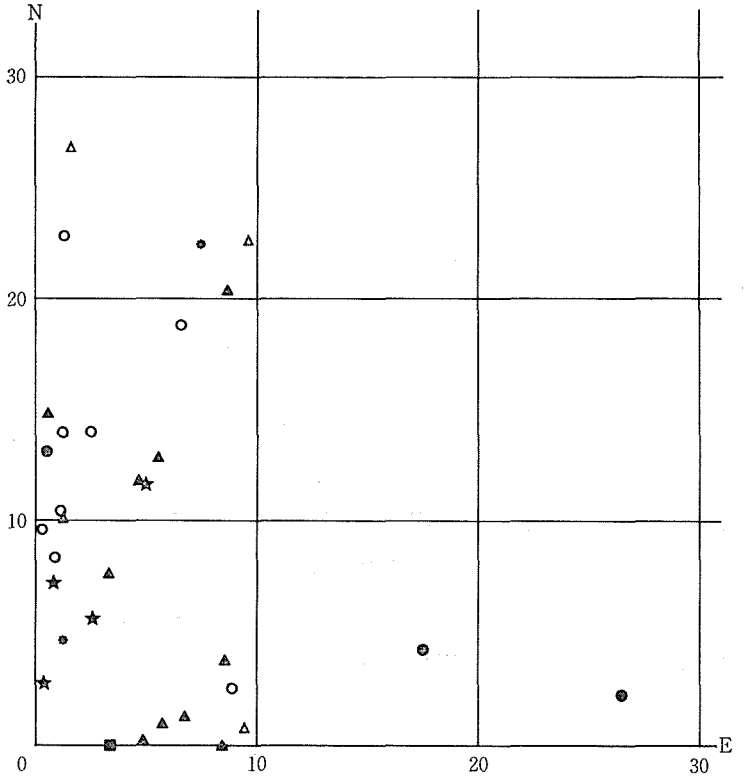
まず、親族関係にある人物たちがお互いに近接した位置に現れている。つまり、イングランドかノルマンディーかのかたよりの度合いが似通っている場合が現れていることに気づく。まず、イングランドに重心がおかれている貴族たちでは、たとえば、Ralf Basset とその息子 Richard Basset[13] 同じく Eustace fitzJohn とその兄弟 Payn fitzJohn[14] がいる。また、William de Tancarville とその息子 Rabel de Tancarville,[15] Miles of Gloucester[16] とその父 Walter of Gloucester, Humphley de Bohun[17] 父子らもそのかたよりが似通っているとみられよう。そして、Ralf Basset と Richard Basset は、イングランドの sheriff 職と justiciar 職を経験しており、fitzJohn 兄弟については、Eustace は justiciar 職、Payn は justiciar 職と sheriff 職を経験している。Humphrey 父子は王の steward であり、この家に世襲的であったと考えられる。また、Miles of Gloucester は父 Walter of Gloucester の sheriff 職と constable 職を受け継いでい



カテゴリー	記号	番号	人　名
2	△	1	Hamo dapifer
		2	Hugh Bigod
		3	Miles of Gloucester
		4	Nigel d'Albini
		5	Robert de Vere
		6	William de Tancarville
		7	William d'Albini pincerna
3	▲	1	Geoffrey Rufus
		2	Geoffrey de Clinton
		3	Geoffrey fitzJohn
		4	Payn fitzJohn
		5	Ralf Basset
		6	Ranulf Chancellor
		7	Robert Sigillo.
4	★	1	Robert count of Meulan
		2	William de Warenne
5	●	1	Robert earl of Gloucester
6	○	1	John/Lisieux
		2	Walter G./Wincester
7	●	1	Bernard/St.David
		2	Robert/Lincoln
		3	Roger/Salisbury
		4	Thurstan/York

○でかこまれているのは認証頻度に有意差があると考えられる人々
(カテゴリー1は認証回数が少ないためこの図には登場しない)

図3　認証回数の多い人物



カテゴリー	記号
1 その他貴族	■
2 行政家系	△
3 新人	▲
4 大貴族	★
5 王の一族	●
6 高位聖職者	○
7 新人でかつ高位聖職者である人々	●

図4　認証頻度に有意差のみられる人物

る。Tancarville 父子の場合も、chamberlain 職は父から子に受け継がれているのである。すべての親族たち同士がこのような関係にあるわけではないが、シェリフ職のような地域性のある役職と受け継ぐことは、貴族たちの中本拠がイングランドかノルマンディーかのどちらかに決まっていく方向を促進する要因の一つとなったと考えられるのではないだろうか。[15] そして、王の宮内府の中でも Tancarville 父子の chainberlain 職にみられるように、イングランドかノルマンディーかに重心をおく人物が担っていた役職があることは、すでにイングランドとノルマンディーにおいて役職の分化が存在し「王のもとでの一つの宮内府」と言い切れないことを示していると思われる。また、前述したように、認証回数の多い王の側近グループのなかにも活動の中心がイングランドかノルマンディーかにかたよっていた人物たちが存在したことも分化を示唆していると考えられるのである。

以上のことから、ヘンリ一世のもとで活躍していた貴族たちについて、イングランドとノルマンディーの双方の地を行き来し、活躍していた貴族たちと同時に、その行動にイングランドかノルマンディーかのかたよりが強くみられる人物たちも多く存在していたことが具体的に示されたといえよう。つまり、ヘンリ一世の発給した特許状の認証史料からヘンリに仕えたアングロ＝ノルマン貴族たちのイングランドとノルマンディーでの活動という点については、ル＝パトゥーレルの主張するほど平均的に行き来していたわけではなく、イングランドあるいはノルマンディーにその活動の中心をおいていた貴族たちが多数存在していたことになるのである。

① *REGESTA REGUM ANGLO-NORMANNORUM 1066–1154*, vol. 2, *REGESTA HENRICI PRIMI* ed. by C, Johnson, H. W. Cronne, Oxford, 1956, (RRAN と略記)

② Bates, "The earliest Noman Writs", Yver, J., "Le Bref Anglo-Normand", *Tijdschrift voor Rechtsgechiedenis*, 29, 1961.

③ Bates, "Review—C. W. Hollister, *Monarchy, Magnates and Institutions in the Anglo-Norman World*", *Albion*, 19, 1987. において、「認証すなわちその場にいた証拠」と考えることの危険を主張する。一方 Hollister, "Courtly Culture and Courtly Style in the Anglo-Norman World", *Albion*, 20, 1988, は反論として、当時の貴族たちにとり宮廷に出席することがいかに重要だったかを考慮すれば、認証はある程度の確実さを持つと主張する。

④ 特許状の認証は、一～三回ほどのみの人物が大変多い。Newman, *Anglo-Norman Nobility*, Introduction, Chap. 5.

⑤ 前章　表1を参照。

⑥ 有意差があるとは統計学的にみて認証頻度に偏りが存在する可能性が高いことを意味し、計算式に当てはめることにより検定することができる。

⑦ Hollister, *op. cit*; Newman, *Anglo-Norman, Nobility*, p. 16 ff., 48 ff.

⑧ Bates, "The origin of Justiciarship" p. 11; Green, *Government* p. 5, chap. 3. ロジャーの王の代理としての公式性はまだ曖昧だとしている。

⑨ Crouch, D., "Geoffrey de Clinton and Roger earl of Warwick; New Men and Magnates in the Reign of Henry I", *B.I.H.R.* 55-6, 1982.

⑩ Southern, *op. cit.*, p. 147.

⑪ 佐藤「イングランド封建制の発達過程」一三～一五頁、青山　前掲書、二〇六頁。

⑫ Bates, "The earliest Norman Writs"; Yver, "Le Bref Anglo-Normand".

⑬ Basset 父子については Green, *Government*, p. 231, RRAN, p. xviii ff.

⑭ Green, *op. cit.*, p. 250f.; RRAN, p. xix.

⑮ Green, *op. cit.*, p. 275; RRAN, p. xv.

⑯ Green, *op. cit.*, p. 256f.; RRAN, p. xvi.

⑰ Green, *op. cit.*, p. 236.

⑱ Sheriff 職については Green, *English Sheriff to 1154*, London, 1990.

おわりに

最後にこれまで述べてきた事実をまとめておこう。

筆者は、アングロ＝ノルマン王国を、内部の人的構造に注目することにより考察したいと考えた。ル＝パトゥーレルなどの主張する、イングランドとノルマンディーの密接なつながりを主張する見解にあげられていた内部の貴族の同質性については、本稿でいくつかの疑問を提示することになった。

まず、双方の地のつながりという点と内部の均質な構造を区別して考えなければならないと指摘した。そのうえで、君主たちがイングランドとノルマンディーを合わせ持つことによって征服王時代のアングロ＝ノルマン王国を再建したいと望んだことは認められるであろうし、また、イングランドとノルマンディーの双方に所領をもつことになった当時の貴族

たちもアングロ＝ノルマン王国の分裂時代においてたしかにイングランドとノルマンディーが別々の君主に統治される事態をさけようと苦慮したことがわかっている。その点からはイングランドとノルマンディーの「密接なつながり」という主張は意味がある。しかし、そのことと、同質の貴族層は必ずしも対応しないと考えられる。

本論ではヘンリ一世時代のアングロ＝ノルマン貴族たちを中心に具体的にその活動について検討した。まず、ヘンリのもとで活動していた貴族たちについては、ル＝パトゥーレルのいうようにその行動においてイングランドかノルマンディーかのかたよりが少ない貴族たちがみられると同時に、やはりどちらかに活動の基盤をおいていたと考えられる貴族たちが多数存在していたことがわかるのである。彼らのうちにはいわゆる新人たちが多く含まれ、また、彼らは専門の行政に携わっていた人物たちでもあった。また、ヘンリを支持していた貴族たちではイングランドに大きな所領を持つものが多く存在した。一方、ヘンリに対し反抗的だった貴族たちはイングランドにあまり所領を持たないものが多く、また、イングランドに渡って王に奉仕することもあまりなく彼らをアングロ＝ノルマン王国全体の支配層に含めることはできないと考えられる。このように、ヘンリ一世時代の貴族たちについて、王のまわりにはイングランドとノルマンディーを行き来して彼に奉仕する貴族たち、そして活動領域にかたよりを持って行政に携わる貴族たち、その外側にヘンリに反抗的でイングランドに関わりを持たないノルマンディー貴族たちという多層構造がえられるだろう。

ウィリアム征服王時代に大陸からわたってきた貴族たちは、イングランドに所領をえていわゆるクロス・チャネル・エステイトを保有することになった。しかし、彼らがウィリアム二世、ヘンリ一世初期の時代の争乱においてノルマンディー側ロベールについた場合イングランドの所領は没収される。こうして没収されたイングランドの所領は王のパトロネジとして彼に忠実な貴族たちに再分配されてゆくこととなった。王のパトロネジとしてイングランドの土地をえた貴族たち、それはヘンリ一世時代に行政によって上昇してきた新人たちを中心に、王のパトロネジにつらなろうと王権に忠実に奉仕したひとびとであったのではないだろうか。彼らがイングランドに主に所領をえていたことは、アングロ＝ノルマン王国

内部におけるイングランドとノルマンディーの関係、その政治社会構造を規定する一つの要因となってくるはずである。さらに、イングランドの土地を没収して分配するということが可能であった背景として、イングランドとノルマンディーの所領保有の違いをあげた。征服後、王権の主導によって所領の下封が行われ、新たな様々な行政努力が必要とされたイングランドでは、王権が自ら多数の証書を発給して秩序を維持して行く社会であったのに対し、ノルマンディーにおいては、封建社会の枠組みのなかで公権力はイングランドほど上からの力を浸透させてゆくことはできなかった。このような社会構造の相違を前提とした両地域が、征服ののち、世代交代をへてどのような関係を維持していったのだろうか。

本稿では、ヘンリ一世時代を中心にアングロ＝ノルマン貴族について検討したが、彼らアングロ＝ノルマン貴族たちを集団として扱うことによりその全体的な把握を試みたものにすぎない。イングランドとノルマンディーのそれぞれの社会構造の相違は貴族たちの行動を規定し、それぞれの地域の独自の発展を導いたのではなかったか。それにもかかわらず、スティーヴン時代の内乱ののち、ヘンリ二世によるいわゆる「アンジュー帝国」として再統合され、一三世紀はじめフランス王フィリップ・オーギュストによりノルマンディーとイングランドが分離されるまで一人の君主のもとにとどまるのである。海峡をこえて異なった社会構造をもつ両地域が今後どのような同化・発展のメカニズムを経験していったかという問題は今後の課題となろう。

（京都大学大学院生　　）

The Nobility in the Anglo-Norman Realm

NAKAMURA Atsuko

The firm relationship between medieval England and Normandy which John Le Patourel emphasized in *The Norman Empire* (1976) and other works dramatically changed the standard model of an insular medieval England. In 1066, William, Duke of Normandy led the Norman conquest of England and established the so-called "Anglo-Norman Realm." The realm consisted of two regions, one on either side of the English Channel. Had the Anglo-Norman Realm consolidated medieval England and Normandy as firmly as Le Patourel asserted? Did the two regions in fact form a single political entity?

When examining medieval realms, it is important to remember their differences from modern nations, and to keep in mind that they were founded on accumulated layers of groups of people. For this reason, it can be said that the nobility formed the top layer and thus one of the most important components of the medieval realm. By studying the nobility, we can learn about one side of the Anglo-Norman Realm.

In this paper, the auther has focused on the Anglo-Norman nobility with the intention of giving a picture of their activities as a whole, considering also the relatiobship between the nobility and the monarch. To this end, she has carried out a statistical study of chronicles and chater evidence. The auther concludes that the Anglo-Norman nobility adapted to the unique characteristics of regions within England and Normandy to form a governing class full of variety.

Michael III and the "Gefolgschaft"—The Emperor and the Ruling Structure in the Ninth-century Byzantine Empire

KOBAYASHI Isao

H.-G. Beck, the German scholar of the Byzantine Empire, explained the Byzantine social structure by using the term "Gefolgschaft (Following)." He asserted that Byzantine society had very high social